

【代表研究者】

馬場 匡浩

早稲田大学大学院 文学研究科 博士課程

【共同研究者】

齋藤 正憲

早稲田大学 本庄高等学院 教諭

【研究題目】

古代エジプト・先王朝時代遺跡の保存に向けた緊急踏査

【研究の目的】

古代エジプト王朝は類い希な文明を築いたことで有名であるが、その源流は王朝以前の先王朝時代に見いだすことができ、当該時代の遺跡調査・研究が重要であることは論を待たない。しかしこれまでに申請者が実見したところ、先王朝時代の遺跡は盗掘や宅地開発・農地拡大などにより崩壊・消滅の危機に瀕しており、調査・保存の対策が急務であることを実感した。こうした現状を打開すべく、本研究では先王朝時代の主要な遺跡が点在するエジプト南部を踏査し、遺跡の現状を把握すると同時に詳細な記録をとり、古代エジプト文明の根源である先王朝時代の遺跡を積極的に調査・保存する必要性を、世界に訴えることを目的とする。これは、人類共通の貴重な財産である文化遺産を後世に残すという現在に生きる我々の責務を果たすものであり、なおかつ当該時代の調査・研究を促進させるものとなる。

【研究の内容・方法】

本研究での対象地域は、エジプト南部、ルクソール近辺の南北 80 キロに及ぶナイル川流域沿いである。ここには当該時代を代表する重要な遺跡が点在しており、本研究ではこれらを含めて約 15 件の遺跡を実見する予定を立てた。そのためにまず、日本国内においてエジプト南部の発掘調査史を再度調べ、遺跡の位置やその検出状況に関する詳細な情報を得る作業を行った。先王朝時代遺跡の発掘調査は、いわゆる発掘黄金期の 19 世紀末から 20 世紀前半に行われたものが大半を占めるため、報告書に記載されている遺跡の位置や状況が現在とは大きく異なっていることが考えられる。そこで、衛星画像による地形図やエジプト住宅省が作成した地図と報告書のそれを照らし合わせて、緯度経度をもつ正確な遺跡分布地図の作製を行った。

次に、遺跡の環境に関する情報を収集した。先王朝時代の遺跡は概ね、ナイル川兩岸の緑地帯と砂漠の河岸段丘が接するその境界区域に営まれている。しかし近年、アスワン・ハイ・ダム建設に伴った環境の変化や、急速な農地・宅地の拡大により、遺跡を取り巻

く環境は大きく変容し、それは悪化の傾向にある。その変化を正確に掴むため、20世紀前半に行われた調査の報告から当時の遺跡環境に関する情報を収集し、現地踏査での比較資料を作成した。

現地踏査では、以下の事項を遂行した。

- 1．遺跡の正確な位置と環境の把握、
- 2．崩壊の度合いの調査、
- 3．写真等による遺跡の現状記録、
- 4．近隣住民への聞き取り調査。

作成した地図と持参した小型GPSを駆使して遺跡にアプローチし、周囲の環境とその現状を把握した。そして遺物の散乱状況や遺跡の崩壊の度合いを調べると共に、写真や簡易測量による記録を行った。また、近隣住民への聞き取り調査では、彼らが遺跡を遺跡として認識しているのか、また現在でも盗掘が横行しているのかなどについて調べた。

【結論・考察】

約2週間におよぶ現地踏査では、15件の遺跡を実見する計画であったが、踏査の結果、遺跡の場所を特定できなかったのが7件であり、特定できた8件のうち完全に消滅していた遺跡は3件であった。アルマント遺跡は、その出土資料から当該時代の編年が確立された歴史的に重要な遺跡であるが、現在は農地と現代の墓地と化していた。これはゲベレイン遺跡やエスナ遺跡でも同様である。また、先王朝時代最大の遺跡であるナカダ遺跡では、僅かに遺構が確認できるもののその大半が掘削され、今後農地化されるようであった。また、10年前の記録では無かったが、遺跡を二分するように幹線道路が整備されていた。ヒエラコンポリス遺跡は現在も調査が行われていて遺跡の残存状況も比較的良好であるが、世界最古の巨大煉瓦建造物とされる遺構が、資金的な問題により保存対策が実施できず、崩壊の状況にあった。バツラス遺跡の目の前に住む人に遺跡について聞き取り調査を行ったが、彼らは遺跡であることを認識していなかった。また他の遺跡では、近年にも盗掘が行われていたようである。盗掘の問題は深刻であるが、それ以上に遺跡の重要性が忘れ去られた農地拡大・インフラ整備による破壊が深刻であることを痛感した。こうした問題は学会発表や論文投稿によって今後報告する計画である。